



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

ヒューストンで暮らした最後の夏に、現地の小学校に通っていた子どもたちをサマーキャンプに行かせた。アメリカの夏休みは5月末から8月末までと長く、親たちはその間の子どもを過ごす方について頭を悩ませる。その選択肢としてサマーキャンプがある。スポーツ施設や教会や大学主催の日帰りのもの、自然豊かな土地で週単位で過ごすものなど各種ある。

わが家の子どもたちは、古くからあり評判の良いサマーキャンプに2週間参加することになった。参加者

は全米から集まり、男女別で、小学生では低学年と高学年のグループがあり宿舎

〈13〉サマーキャンプ

で寝食を共にする。そのキャンプのホームページを見ると今もあまり変わっていないようだ。5、6人のグループにはリーダー(指導員)が付き、水泳、乗馬、カヌー、アーチェリー、球技などさまざまな活動を行う。娘のグループのリーダーはオースト

リアの大学生で2月から研修を受けたそうだ。屋内活動としてテキサス州らしく皮細工もしたとのことである。屋外での炊飯、調理もある。食事も施設も充実していた。

そのキャンプはハントという所にある。ヒューストンからフリーウェーを西に走り、アラモの砦(とりで)で有名なサン・アントニオを越え、なだらかな丘陵地帯をグアダループ川に沿って走った。あまり背の高くない木々の森や、牧場や、川遊びをするのにちょうど良い川があり、西部劇に出てきそうな所であった。途中の風景も、いかにもアメリカの田舎といった感じで不思議なノスタルジーを感じた。

朝の集合時間に間に合つように、近くの田舎町で前泊した。子どもたちとミニバンの後部いっぱいの荷物を送り出した後の不安な気持ちは今でも覚えている。サマーキャンプ中の息子と娘の写真がある。息子はコックの長い帽子をかぶり仲間と調理・食事の準備をしている。娘は馬と顔を寄せ合って笑っている。今まで親が見たことのないような幸せそうな顔をしている。自然豊かな地でのキャンプは、子どもたちの心の中に何かを残したに違いない。

将来を担う子どもたちに、ぜひこの紀南の地でもとびきり楽しい夏を過ごしてほしいと思う。